

活動報告

韓国出張記

ERINA 調査研究部主任研究員
三村光弘

はじめに

2022年3月28日～4月19日の間、韓国を訪れた。最初の7日間（4月4日午前0時まで）は検疫隔離だったので、実際に行動したのは2週間だった。韓国は隔離免除適用除外国以外からの入国について、3月21日からは韓国国内または海外で新型コロナウイルス感染症ワクチンを完全接種（世界保健機関緊急使用リストに記載されているワクチンを完全接種してから14日経過、かつ180日以内であること、または3回以上接種）し、韓国国内で接種履歴を登録した人に対して入国時の隔離免除を開始した（海外でワクチン接種を完了し、韓国国内で接種履歴を登録していない場合は4月1日から）。

仁川空港到着から検疫ホテルへ

筆者の場合、入国時の隔離免除に該当しなかったため、7泊のホテルでの隔離となった。韓国は検疫情報事前入力システム（Q-CODE）へパスポート情報、電子メールアドレス、航空券情報、PCR検査陰性証明書、ワクチン接種証明書、健康状態質問書などを事前に入力する、日本のファストトラックと同様のシステムがある。筆者の到着時にはQ-CODEのQRコードを提示することで迅速に審査が受けられ、飛行機を降りてから検疫の登録を済ませ、入国審査を通過し、手荷物を受け取って、到着ロビーにある検疫ホテルへのバスの待合場まで30分しかかからなかった。韓国の場合、夕方以降に到着した場合、到着時のPCR検査は検疫ホテルで行うため、PCR検査や抗原検査を受ける時間の分、日本よりも短くなるが、日本では

以前は飛行機を降りてから到着ロビーに着くまでに最短でも1時間半、平均して2時間から3時間程度かかっていた（今回、ファストトラックを利用して1時間程度で到着ロビーに出られる場合もあることがわかった）のに比べると電子化が進んでいることと優秀な要員の確保ができていて（空軍から多くの兵士が動員されていた）ことが迅速な手続を可能にしている。

検疫ホテルは金浦空港に近い、ソウル市の境界線からほど近い京畿道金浦市の漢江沿いのマリーナにあるリゾートホテルを一棟まるごと貸し切る形で運営されていた。これは日本でも同じである。空港からのバスの所要時間は30分ほどで、飛行機が到着してから1時間強で検疫ホテルに到着し、手続を終えて部屋に着いたのは到着から2時間以内であった。

日本のMySOSと同じく、韓国でも位置情報と健康状態を確認するアプリをインストールし、到着情報をセットアップする必要がある。セットアップには韓国の携帯電話番号が必要なようで、日本の番号をシステムは受け付けるのだが、登録に必要なSMSは届かなかった。結局、韓国の携帯電話番号を持っていない全員が係員の携帯電話番号を入力してセットアップが完了した。韓国では検疫ホテルの料金は自弁で、筆者の滞在した施設では1泊あたり12万ウォン（約12,500円）で7泊分の84万ウォンをカード（韓国ウォンか米ドルの現金で払うこともできる）で決済した。

検疫ホテルでの生活

検疫ホテルでの生活は、外出できないため食事とインターネットが楽しみとなる。韓国の検疫ホテルでの待機は、日本の検

疫所からの要請ベースの任意（拒否すると停留扱いとなるので半強制ではあるが）の待機と異なり、勝手にホテルから抜け出すと1年以下の懲役か1千万ウォン（約105万円）の罰金が課され、外国人の場合は退去強制の上、5年間入国禁止となる。

写真1 検疫ホテルの昼食



写真2 検疫ホテルの夕食



検疫ホテルのシステムは韓国と日本が瓜二つで、食事は部屋のドアの前に設置されたテーブルや荷物ラックに配達され、配達が終わると放送が流れて受け取りを促される。オートロックがかかって部屋から閉め出されないように注意する（韓国の場合、これが隔離条件の違反になりうる）放送がある。食事は韓国料理、西洋料理

(ただし完全な西洋式ではないとの但し書きがある)、肉食、ハラル食の4種類があり、最初は韓国料理が自動的に配られるが、7日間のうち1回だけ変更が可能になっている。筆者は最後まで韓国料理にしたが、写真1、写真2のように白飯、汁、おかずの3点セットになっており、昼食には魚料理、夕食は肉料理が出た。全体的に揚げ物が多く、汁があることとキムチが入っていることを除けば、日本の検疫ホテルの食事とほとんど変わらなかった。

退所方法の違い

退所方法も日本と韓国とで瓜二つであり、検疫所がチャーターしたバスで指定地点まで送るといったものであった。筆者が過ごした検疫ホテルからはソウル駅とソウル高速バスターミナルの2カ所に向けてバスが出ていた(日本の場合は、基本的に到着した空港、東京都内の検疫ホテルになった場合にはそれに加え東京駅)。韓国の場合、法に定められた行動制限として隔離が位置づけられているため、退所日の午前0時(深夜)にも迎えの車がある場合には退所できるようになっていることが日本と少し異なるところだろうか。

ソウル市内のマスク着用状況

ソウル市内の様子であるが、基本的には日本と変わらない。日本ではマスクの着用は法的に義務づけられたものではなく、社会規範(エチケット)としての着用であるが、韓国の場合は義務である(5月2日より屋外でのマスク着用義務が調整され、50人以上の集会以外は義務免除)。

昨年訪れたロシアとは異なり、韓国で

はマスクの着用がほぼ完璧に徹底されていた。例外は飲食時であるが、列車内での飲食が禁止されており、水を飲むわずかな間くらいしかマスクを外すことができなかった。安心と言えば安心であるが、少し前までは権威主義国家であった韓国の公共の福祉のための私権制限に対する感覚とそれに従う人々の姿を見ると(筆者から見ると台湾とシンガポールもこれに近いと思う)、日本社会の無言の圧力とはまた異なった社会の存在を感じた。

写真3 ソウル市内の様子(鍾路区仁寺洞付近)



写真4 ソウル市内の様子(同)



写真5 ソウルの地下鉄駅で



写真6 ソウル市内のレストラン街



大統領官邸の裏山が一般人に開放される

2022年4月6日から、大統領官邸(青瓦台)の裏山が一般人に開放された。これが大きなニュースになるのは、韓国の中高年層の多くがハイキングを趣味にしているからである。筆者が訪れた北韓大学院大学は、新たに開放されたハイキングコースの近くにあり、同校の先生方と2時間弱のハイキングを楽しんだ。普段からハイキングをしている先生方はみな健脚で急登もかなりのハイペースで進んで行く。ハイキングに行った日は5月並みの好天で、冬の服装しか持って行かなかった筆者にはとても暑く感じられた。

一般市民に開放したとはいっても、大統領官邸は重要施設である。ハイキングコースの入口には改札があり、入山証(ICカード)を受け取り、帰りに返すようにすることで、山にあと何人残っているのかが分かるようになっている。入山時間も昼間に限られている。また、監視カメラや各種センサーが目立たないように設置されており、ハイキングコースが大統領官邸襲撃に利用されないよう対策が行われている。

写真7 三清公園から裏山への入口



写真8 展望台からソウル市内を望む



稜線上には開放前からある哨所が点在し、展望台からはソウル市内を望むことができ、絶景であるが、北側を見ると防空設備(捕捉・追尾レーダー)が見え、ここが

軍事境界線からわずか70キロ（マッハ2で飛ぶ戦闘機なら32秒で到達する）しか離れていない現実に引き戻される。

写真9 稜線上の哨所と防空設備



おわりに

韓国の社会的距離の確保（食堂・カフェ等の営業時間制限、私的な集まりの人数制限等の措置を含む日本の緊急事

態宣言やまん延防止等重点措置に相当する各種制限）は筆者の帰国前日の4月18日から解除された。日本と同じく、外国からの観光客はまだ受け入れが始まっておらず、以前は中国や日本からの観光客で賑わっていたソウル市内中心部の明洞も写真10や写真11のように人が少なく、閉店して借りが付かない様子の店も少なくなかった。

写真10 明洞にて



写真11 明洞にて



1日あたりの感染確定者が数十万人台であった時期に社会的距離の確保を解除することには反対も大きかったようであるが、経済に与える影響を考えると、1日でも早く解除する必要に駆られていたとも言える。韓国も本格的にウイズコロナ、アフターコロナの時期に入ったが、これまでの制限措置で落ち込んだ経済が早期にどこまで回復するか、予断を許さない状況が続いているといえる。

※写真は全て筆者撮影